

府立四中ってどんな学校？

齊藤徳浩（S32）



いまでも「四中・戸山」は合わせて言われるように、我が母校にとって「四中」は欠かすことのできない存在です。では「四中」とはどんな学校だったのでしょうか。歴史をさかのぼってみたいと思います。

そもそも我が母校が創立されたのはいつのことでしょうか。戸山高校の「百年史」によると明治21年(1888)9月「私立補充中学校」として発足したのがはじまりです。その約半年後、明治22年(1889)2月に「大日本帝国憲法」が公布されていることを思うと、我が国がまだ「立憲国家」とし

て国家体制を整えようとする胎動の時代であったことがわかります。

【私立補充中学校の時代】

我が母校の始まりは「補充中学」でした。では「補充中学」ってなに？ あまり響きがよくありません。

明治21年当時の東京には、公立中学校は東京府尋常中学校（現日比谷高校）一校しかありませんでした。最高学府・帝国大学（現東大）に入学するためには全国の5校しかない尋常中学校（東京第一、仙台第二、京都第三、金沢第四、熊本第五）を経なければなりません。東京では東京尋常中学校（現日比谷高校）しかなく、応募者が殺到することになりました。そこで分校の設置が考えられました。応募者600人、試験の結果、合格者200人となりました。ところが東京府の財政事情で、分校の設置は見送られることになりました。いまさらそんなことをいわれてもと立ちあがったのが、東京府学務課長・元田直、東京府尋常中学校長・丸山淑人、同教諭・今泉定助、皇典講究所幹事・松野勇雄の4氏でした。この人たちは「尋常中学校に欠員ができたなら、ただちに“補充”できる『補充中学校』を開設しよう」と企画しました。そこでできたのが「私立補充中学校」です。明治21年(1888)9月6日、麴町区飯田町（現千代田区飯田橋）の皇典講究所の一面に補充中学はできました。皇典

講究所とは、明治 15 年(1882)に設立された、日本伝来の精神文化、道義の研究を通じて、国家有用の人物を養成しようとするものでした。

では、実際に補充された生徒はどれくらいいたかということ、明治 21 年に 12 名、明治 22 年に 78 名、明治 23 年に 63 名、計 153 名でした。

【私立共立中学校の時代】

明治 24 年になると「中学校令」が一部改正され、各府県 1 校とされていた尋常中学校が複数化されました。そのため「補充中学校」の名はわずか 2 年半で終了し、明治 24 年 4 月からは、「私立共立中学校」へと名前を変えて再出発することになりました。校名は先程の補充中学校の発起人になった方々が、同士の共同設立という意味で「共立」とされました。しかし成績次第では東京府尋常中学校に進めるという特典がなくなったため、補充中学では 300 人いた生徒が、共立中学になると 250 人に減少してしまいました。我が母校の一番苦しい時期でした。このときに福島師範から呼ばれたのが後述する深井鑑一郎でした。

【府立城北尋常中学校の誕生】

明治 27 年 4 月、沈滞していた共立中学校は「東京府立城北尋常中学校」として、東京府の管理下におかれるようになりました。

明治 25 年 3 月、起死回生の策を関係者が一堂に会して協議の結果、やはり府の管轄下に入るのがいいということになり、供託金を集めて府に納付し、府立学校と同じ待遇を受けることになりました。

「城北」の由来は、学校が東京府麹町区飯田町（現千代田区飯田橋）という皇居のほぼ北にあったからです。

【府立四中のはじまり】

明治 34 年(1901) 4 月、府立中学はナンバーで呼ばれるようになり、我が母校も「東京府第四中学校」と名を改めました。名実ともに府立校となりました。校長は共立中学以来の深井鑑一郎が継続しました。

細かいことですが、明治 34 年 7 月 1 日より東京府の方針により、校名は「東京府立第四中学校」と「府立」に改められました。

【同窓会「城北会」の発足】

大正 12 年(1923) 5 月 20 日、本校出身者の同窓会の大会が開かれました。350 人が参集し、「城北会」と命名されました。以後、今日まで毎年 1 回開催されています。なお、関東大震災が大正 12 年 9 月 1 日でしたから、その直前です。

校友会誌の「城北」はさらに古く、明治 27 年の「府立城北尋常中学校」発足のころに創刊されているようです。

以来、城北会は母校の影になり日向になり、先生・生徒を支えてきました。現在では国内ばかりでなく海外にも支部ができ、ニューヨーク城北会、中国城北会もさかんに活動しています。その支部が東京にあったりします。

【深井鑑一郎校長の功績】

共立中学のころ、成績によっては東京府尋常中学校に進めるという特典がなくなったために、応募者が減って、学校の危機を迎えました。そこで幹事だった今泉定助が、学校を立て直すには優れた教員が必要だと考え、白羽の矢を立てたのが福島師範学校の漢文の教諭だった深井鑑一郎でした。今泉・深井の両氏は帝国大学（現東大）の古典講習科の同窓生でした。招聘が決まったのが明治24年9月、時に今泉氏は28才、深井氏は26才でした。これが我が母校の大きな転機になりました。

深井鑑一郎はその後、四中在職47年、校長として40年の長きにわたってつとめられました。その間、生徒の勉学に厳しい眼を向け、予習復習を義務付けると同時に、運動会のような勉学にさしさわる行事は中止させました。四中の生徒は身なりがきちんとしており、歩き方を見るだけでもわかるといわれたようです。

深井校長は私財を投げ打ってプールをつくって府に寄贈したり、那須の御領地を払い下げてもらって那須道場をつくったりしました。那須道場は当時、皇室林野局長官であった三矢宮松（明33四中卒）に協力依頼して払い下げが実現したものです。昭和12年、道場が完成すると、毎週1クラスずつ交代で合宿することになりました。

昭和9年11月15日、深井校長が古稀を迎えたことを記念して城北会が「古稀祝賀会」を開きました。これを機に募金活動をしたところ、15,000円が集まりました。その内10,000円を基金として「深井奨学金財団」が設立されました。深井校長はこれを契機に退職を申し出ましたが、当時「四中の深井か、深井の四中か」といわれるくらいで、なかなか受け入れてもらえませんでした。昭和13年(1938)7月になって、やっと後進を西浦泰平に託してついに退職することになりました。このニュースは新聞・ラジオでも大々的に報道されました。

深井校長の名を永く留めたいと、城北会が主唱して胸像をつくることになりました。制作は彫刻家の斎藤素巖（明40卒）に依頼して、昭和14年6月に除幕式が行われました。現在もこの胸像はラジアン池のそばに安置されています。

深井鑑一郎は昭和18年、再度の脳溢血のため帰らぬ人となりました。77才でした。

さて、戸山高校卒の我々はこれをどう理解すればいいか。昭和32年卒、81才の我々ですら男女共学で、舟木一夫の「高校3年生」ではないが「ぼくらフォークダンスの手をとれば甘く匂うよ黒髪が」の時代でした。四中の質実剛健とはまったく違います。しかし東大の合格者数をみれば1学年80人以上で、決して四中に負けてはいません。時代は変わっても精神は受け継がれていると解釈してもいいのではないのでしょうか。